

すでに人々の心からはその名も人も忘れられている。

銅を熔かし、銅線を始めに作った人は誰であろう。これがなかったら、エヂソンの発明も発見も日の目を見ることはないであろう。

これ等凡てを始めに作った人達は、野心から作ったものではなく、自身の必要と他との関連に於て、創造性を発露した個性に於ける意志による賜物であり、作らずにはいられない、人間性そのものなした業である。

こうした個人的な発展が永い歴史の間に、衣を食を住を、充実進化させるのであって、個性ある、創造性を余議なくされている人間なればこそ、文化の実体なのである。

即ち民衆こそ歴史の創造者なのである。

言葉は誰から、いつ、どこから始まったものであろうか？ 絵を描き、その絵を字に創作したのは誰か？ これ等はみんな庶民自身の個人的な創作になるものであり、知識はその間に蓄積され、こうした共有と連帯によって産れた、人類不滅の財宝は、歴史上に沈潜する事があつても、平等の原理として継続されている。

然るに共有である可きものや、社会的連帯の基本が、私欲と巧利性とに汚濁された時、即ち権力と權威によつて庶民を蹂躪し、収奪する野蠻が遂行され、言葉も文字も知識もそして教育までも独占され、あまつさえ、社会的習慣までに作り上げられている現実なのである。

なお、物質的文化は、意志及び、意識活動の介在なしには創造されないものであり、意志と記憶と経験の媒介を経た、創造的意欲と技術こそ、あらゆる建設、創作、発明発見の母体であつたのである。

人類の歴史はその特殊性である意志によつて作られ、意志によつて相伝された記録であると共に、人類史は多様な因子のもとになり、その内の、意志による創造の分野は広く、深く、且大であつた事を私は信ずる。

三、経済事情に左右された史観

飢餓の防衛と生活的必要の爲めの生産関係が、人間の生活を発展維持せしめた、即ち食う事によつて生存は保持された。

原始人は、その食糧を得る爲めに、山谷を跋渉し、その目は野獣の如く輝き、危険を冒して闘い捕えたであろう、その捕獲したばかりの野獣の生肉に、噛りつきむさぼり食つたであろう原人、あるいは野生の果肉を煩張る妻子を見守る原始の男達、又ある時は、多量の獲物を引提げて、奇声を発して叫び、呼び、鬨歌をあげて、祝いの歓喜にひたりもしたであろう。

その彼等にとつて、火の発見は、食事情に飛躍的な変化をもたらす因となつた。

木片から石作りを経て、火による加工となり、焼物（土器）と変り、銅、鉄、金、銀、の熔解をもたらし、かくて人類は、他の動物に対し、半ば防衛の経済が攻勢に転じ、大いなる力となって君臨するに至った。

これは物資の生産や発見、及び物質そのものの存在と云う、環境なしには成り立たない事をも意味している。

初めに人家に近接し、あるいは生け捕りにされた、鳥や兎や猪は、家畜として育くみ飼われ、鶏、豚と呼び名も変えられ、生きた貯蔵用食糧になった。

一匹を飼ひ馴らし得た経験は、山羊、羊、犬、猫に及び、愛玩用にまで発展し、近世には象、虎にまで及んでいる。

生米を嚼じった過去はすでに語り草となり、玄麦から精白、粉食に、野生の一莖の生嚙りから端を発した栽培が、集約農法の土地を選ばない、あるいは必要としないまでの発展を約す現在にまで、食えたと云うその事が、意識を高め、記憶を重ね、蓄積された経験が発明発見をうながし、重ねた。

これ等は、総べて食糧事情への断えざる関心の為した業である。

定着した原始共産体は、その共同経営の在り方を通しては、同胞相咬む闘争は恐らく異り得なかつたであろう。例えあるとしても、個人的な、小さな争いの範囲をいでないものであり、部族を絶滅せしめる様な、苛酷なものではなかつた筈である。

この地、横浜の丘々は、縄文時代、彌生時代の遺留品が、非常に多く発掘されるが、その中に、この地にはなかつた黒耀石が多数発掘される。これは物々交換を意味し、又一ヶ所からの数多い石鏃の発掘は、専門工場の感さえあり、黒耀石、サヌキ石、その他非常に多く発見された。この地から他地方へ物交した消息を、周囲の在り方が語っている。が、それが総べて祭祀用及び狩猟用の小さな精巧なものなのである。

これ等は、小部族又は大部族、共々相争う事なく、物々交換のなごやかさを謳っているとしか思われまい。

他方、生活の安定化は、恰も家畜になった鶏が、多数の卵を産むそのように、部族は増殖し繁栄した。

恰もこの前後、食糧を追って、あるいは他の貴重と思われた物資を求めて、權威の拡大を計った部族があつた。彼等は共同の神を持ち、相互に話す固有の言葉を語り、侵略に馴れたこの集団は、先住の氏族と衝突した。

即ち、食糧を求めて移住したり、共同の経済状態にありながら、求める物資の独占を願う為めに、他種族との闘争の原因になった事もあり、又、安定と蓄積によつて得られた土地も、部族の多数化や、範囲の拡大に伴い、他民族を侵略せずにはいられない破目に陥入るものもあつたであろう。

これ等は、彼等の生活と繁栄を援ける、経済的には平等な共産体の拡充、又は維持の為

めの行為が、かもし出した環境の展開でもあり、生存の爲めの止むない闘争でもあったが、同時に、歳月は、受動的な防衛の常備から、攻撃的な武備をも教えていった。

こうした中で、すでに侵略闘争の永い日月を持ち、強権に使喉された、故意にする奪略の爲めの闘争を、習慣にまで高めたものもあつたであらう。

かくて闘いは戦いを生み、腕力から棍棒、石、弓、槍、刀剣、銃弾と変化した。

初めに強豪な腕力への崇敬から、英雄視を培い、戦争常備者からその経験の尊重を、やがて指揮者、指導者が作られ、かくて、時を得た彼等の地位は強固なものとなり、強権支配の礎石があつた。

当初の経済事情からの闘争は、共同の負担から発生した闘いであり、彼等はよくその爲めに自らの生命をも断つたのである。

初めによく捕え、よく耕やし、よく働らくものが、よく闘う共同の勇者であつた。

然るに頻発する闘争は、武將と云う特殊な部属をも作り上げた。彼等は初めに、敵を殺戮する事のみ専念したが、味方の労働力の不足化や、対者の経済上の特殊な技術を知るに及んで、捕虜とし、産業の助力者（奴隸）に仕立てあげ、民族による他部族への労働の掠取が開始された、と云う事は、生産技術の交流発展をもたらした因ともなつてゐる。

世界を通じて階級発生の第一項に、司祭者、武將、農工族、奴隸又は賤民、の四階級の存在が、この間の消息をよく物語つてゐる。

印度のビダの神話に、支那、朝鮮、日本の古代の神話、その他あらゆる国々の権力史は、その神話に伝承、伝説に、その古代史に多くを語る所である。

ここに至つて、祭政一致の政治的発足が、司祭者、あるいは司祭権を持つ武將によって施行され、政治するものと、政治されるものとの区分が成立し、爲めに権力把握者と、それを擁護するものによつてなる階級に対し、政治される労働階級が、農耕族、奴隸又は賤民の名に於て存在するに至つた。

初めに共に生きる爲めのものであつて、儀式と供物による神への献上に、悦びと楽しさと、感激に充ちた民衆の共同生産が、宗教的あるいは政治的偽飾と籠絡に気付く事なく、貢俸が徴用に変化し、延いては、強制と掠取と懲罰と云う迫害を強いられ、民衆の経済的逼迫が一方的にもたらされ、爲めに、民衆は彼等強権把握者及びその擁護者の、安寧と幸福と爲樂の爲めに、犠牲と強制を押しつけられる、強権把握者とその擁護者と云う、支配者の爲めの奴隸労働者と化したのである。

日本の古代、縄文時代の後、晩期から彌生時代に於て、帰化人の知識と才能と体験とによる、技術の普及が、庶民の生産活動に、日常の食糧確保と云う、直接的な影響力を持つて、急速な発展をしていった中に、彌生時代に於てロクロを使用したり、昇リガマで土器を焼くと云う事もあつた。

これは一種の機械化とも云いえ様、それ等のもたらす生産能力の発展が、時間の短縮化

と製品の平均化が、土器の製法及びその形態にあらわれてきた。

これに並行して行われた稲作の爲め、かつての血縁共同体が、地縁共同体となり、大集団化を伴い、支配者の掌握の中に包含される、監視下の大衆に変化してゆく。

が、併し、当時の個々の住居は、丘陵地から逐次脱出し、低地や湿地帯と云う地形に分散し、實質的には家族単位の血縁態勢が確立されてゆく、そんな傾向をも見せている。

こうした、ある種の小集団化が興りつつある時、外国の異宗教が、帰化人によつてたらされ、堅穴住居内の呪術宗教により宗族の集団をなしていたものが、経済的な確立に待って、支配者に食入った経済的先導者である帰化人的知能と、その宗教である、祖先崇拜の空間建築である宗廟宗教化や、大墳墓（古墳）のものに逐次変化し、徐々に既成宗教から離脱する傾向をも見せてくる。

その爲め、稲作用具や、その他の銅器や鉄器と云う稀少で強力な生産要具が、宗族的、武力的支配者の独占を好期とし、因となつて、支配力そのものの強化を目的として祭祀用で使用された。

これは配分と云う機会を捕え、恩恵に等しい言行を持つて実施され、爲めに暫らくの間は、鉄器使用及び農具は増加されてゆくものの、武器使用は限定、あるいは認定許可を持つて渡され、条件配分と云う一種の統制の中にあつて、一般民衆及び農民の孤立した、無力な生産奴隷化が開始された。

かくて全面的に、内外勢力に対する、無力化せられ、制圧された農奴、又は農人部落的な分業の孤立化と、支配者に迎合する側近達によつて、搾取を含めての強権擁護行為が行われ、掠取と強制を前程としての、孤立に等しい独立経済的な方向へ、農民の生活は追いやられていった。

この時を境いに、共同の土地や、共同生産品が掠取され、搾取され、あまつさえ私有化されるに至つたのである。即ち、遠い過去に於て、こうした意義に於ける私有財産の発生が、この時を機会に作られた。

……註……拙者「日本史」 参照

支配者、被支配者の二大階級が発生し、支配者の爲めの手足となり、道具となる事を、被支配者は常に強要され、その爲めに作られるタブーが民衆を、恐畏と隷屬的習慣に釘付けすると共に、それから生じた道徳や、法律と云う枠の中に生きる事を、理想的な在り方とされるに至つたのである。

宗教はその爲めに護持され、ある時は利用の具となり、宿命感をも培い、去勢し従順化の爲めに役立ち、教育は、支配を円滑にする爲めの教理となつて培養された。かくて被支配大衆は、支配者の求める経済態勢の爲めの道具化され、物資を生産する爲めの単なる機械視される、その状態に於てのみ、生活を、そして、生存をも保証せられるに至つた。

即ち生産関係と云う、経済制度そのものが、民衆の在り方を決定するに至つた、と云い

得られるのである。

かくて、人類史にとって、最も忌む可く、唾棄す可き、悲惨と苛酷に充ちた、精神的墮落史の頁が展開される最初の一行がなり、血と涙と泥の同胞相咬む、頁が繰られるに至つたのである。

その初行の冒頭は、今をへだたる約五千年以前であり、日本にあっては未だ二千年を出でない。人類史二百万年、あるいは二十万年の永きを思ふ時、支配と被支配の、同胞間に於ける強奪と掠取と云う、人間のみにある墮落史は、未だ僅少な年代に過ぎない。併もその間、近代にまで、一度び権力支配の衰微に遭遇するや、必らずそこには、共同の防衛と、自主と自治の、相互扶助的な共同経済関係が抬頭し、彼等大衆に、その荒廃と苦惨の中に、生存を保持せしめたのである。

現今まで、多く繰り返えされた、あらゆる戦後の農民がそうであり、近くは日本敗戦直後の樺太住民や、日本主権の敗退直後から、ソ聯の支配権力や、米国の傀儡政権が、偽瞞の布陣を確立するまでの期間に於ける、朝鮮民衆の在り方が、よくその消息を伝えている。当時の彼等は、搾取なき協働の、地方自治体の結成者であつた。

初めに力は神であり、臂力であつた。闘争が集団化し、武備が常套化するに及んで武力となり、やがて、政治するものの常態化は、経済力の独占に次ぎ、強制と搾取による護衛官、擁護者の多数化に伴い、大衆の経済生活に、無保証と排他性と孤立化を強化し、彼等

に失職、失業の餓死の自由のみ与え、為めに相互争闘の経済組織の発生と、発展をうながし、かつての力が、武力から経済力に移行していった。

要するに、独占的経済力とは、たとえそれが国有化と云う、国家的統一を意味しようとも、一般大衆の隷屬と、労働の成果に対する掠取なしには成立する事のない、社会組織にのみ発生する、相互争闘―支配又は官僚統制の謂いであつて、もともと共有であつた、そして共有である可き土地と資財が、個人資本の名義あるいは国家の名による、官僚、政党の占有によつて、衣食住の万般は、支配者及びその護衛官、擁護者（共産党を含む政党又然り）の為に掠取される機構なのである。

それ故、ころみに、民衆が遠い祖先の名に於て、その土地と資財を要求し、現在に至るまでの、蓄積された労力とその発明発見や、創造的成果の奪還を叫び求めるなら、一切を大衆に還元す可きであり、又これは、人間が人間の過去を知る正当な要求であると共に、何人もこれを独占したり、占有する権利もないと云い得るであらう。

かくて大衆は、それ自身の嬉ろこびと慰藉と感謝の対象であつた、かつての神への供物が、いつとなく変化して支配者への貢ぎ物となり、年貢が税金と変わり、武力（警察力）と、法文と云う梓により、手枷の生産用具化されるに至つたのである。

即ち、経済力（貨幣による拘束を含む）を万能とする権力的独占の環境内で、これを常態とする社会機構は、所謂社会主義化の線を辿り、国有化が構成されようとも、その本質

にまで変化をもたらすものではなく、再三再四繰り返えされるであろう、人間が経済事情に左右されるの歴史は、人類史にとって、哀れむ可く、余りにも悲惨、冷遇苛酷な隷属的未来の暗示を出でないであろう。

即ち、共有をはばむ独占の、例えそれが国有の名に変わるとも、支配権力の移行でこそあれ、自由な消費と、共同生産の、人間的であると共に、平等で平和な生活は、限られた枠内を出る事が出来ず、経済的、人間的平等は夢想に終り、自由も幸福も、指令され、与えられた範囲を出る事が出来ない、ソ聯の現状は、その間の在り方を実証して余りある。然も、現に権力支配を認めながら、未来は自由聯合社会などと、平然と云い放つ徒輩を、所謂進歩主義者の中に見受けるのであるが、これ等は、その依つて来つた主因に対する、認識不足を暴露した以外ではない。

要するに、経済事情に左右せられる歴史とは、総ゆる権力治下の史実に明らかなように、資本主義、それがソ聯的国家資本主義にせよ、権力掌握と云う決定的理由によって、民衆の生活資料、その他総括的独占に端を発した、決定権そのものの裏面からの説明でしかなく、マルクス経済学はその解明であり、暴露を出せず、それ故、その学説に云う必然性とは、支配権力の転換と推移の必然を意味する、と共に、権力支配は統一されても、必然に多元化を辿る、その別名に過ぎない。又これは権力闘争の波紋を繰り返して止まない、必然の経路とも云える、政治すると云うその事の必然と同意語である。

これは人間性が、常に内部に働らきかけているが為めの必然であり、人間性と云う根幹が、無明ながらも常に欲求して止まぬ、正しい人間の生活への、希望が作り出す必然であるとも云える。

政治史、それは権力史以外ではあり得ない。

受動性を出でない民衆、指令を万能とする指導者の全能者の思念の僭越、及び大衆それ自身の意志、支配せられる事を、信じて疑う事のない時代は、権力的移行を次世へあきる事なく続け、なお又現に、それを継続しようとする者がある。

段階論的過程を信ずるマルキストの様に、個性の抹消された、自主性の乏しい人々による、未来を想起するなら、その宿命観的信仰（唯物弁証法、史的唯物論）に於て、支配権力が現実より未来への、実質的移行を強調する、徒輩さえ続出する現今である。

なお戦争を文化の基本（母）であるかの如く放言する畜獣以下の様な者があるので、それによって思うのであるが、これは又権力支配者にとって、何と都合な論理をなすものか、とあきれるのであるが……。

大衆が銃と剣によって強要され、その死と血と犠牲に於て遂行される、同時多量虐殺の戦争は、誰が興し、誰れがその武器を殺人用具としてのみ役立てるか、先づこの辺を考えて見る。

真理探究者（学者）や、発明発見に専念する、あるいは創造的意欲に燃える、これら善

意の人々による成果を、殺人用の武器に変化させ、集団同時殺人に利用す可く、命令し強要する、権力把持者とその擁護者。それに加うるに、己れの利潤をのみ追って、大衆の平和と幸福を顧りみる事のない、死の商人との結託によって、平和と建設への方向の道は妨げられ、万一にも万人の爲めと云うものではなく、彼等権力把持者及びその支持者達との結託による強制が、経済的甘言や、時には愛国の偽装によって、多量同時虐殺は決行される結果するのである。即ち政治家こそ戦争を造する元兇である。

この意義からは、政治的偽善とその巧妙化、及び教化そのものの方法は、全く進歩し、然も発展し進化し続けると云える。

が併し、戦後になればなるで、この武器を平時に使う用具に作りかえた。ただそれだけのものにも、思着せがましく、戦争は文化の母などと、臆面もなく偽善の畏にかけるのである。

これをしも、戦争は文化を発展せしめる、とても云うのであろうか、戦争がなくとも、又それを思わずとも、知識や経験の公開と相互交流が、資本主義的独占や、権力主義的秘密主義に毒される事なく、行なわれるなら、平和と建設の爲めの、万人の爲めの用具が作られ、戦争によって破壊され、損耗し疲弊したその時間だけ、それだけ進歩が早かったと云える。

これ等から連想して思うのであるが、日本の有史以前のその頃、縄文時代や彌生期に於

て、ジャングルの中で道もなかったであろうその中で、緊密な部落対部落の相互交流の中で、育成された進歩とその文化が、黒耀石の破片や、土器片に刻まれた縄目文一つを取り上げて見ても、うなづけるのである。

知識と技術の交流が、私利私欲を離れた共同自治の中に、北は奥羽地方から九州に至るまで、こりも美しく、広く、深く行なわれていたものか、と、一片の土器片を手にしても、感ぜずにはいられない。思えば、この時代の人々にも劣る、精心的在り方だと云える。

学者や真理探究者による成果である核分裂や、核融合の原理を、万民の福祉の爲めにはなく、同時多量虐殺の爲めに利用し、原水爆を完成させたのは何者なのか。

熱核融合の原理を、平和産業の爲めに具体化し、万人類の爲めのものとするその技術者は、時の支配権力や、死の商人の爲めの道具以外ではなくなっている。

彼等は飼われた羊でしかなく、爲めに、彼等自身も又、多量虐殺の方向へその技術を傾倒し、墮落させられてゆく、事実は現実のこの時点にさえ、その誤った方向が指し示されている。

権力支配者やその支持者、それと死の商人共は、平和を、そして万人の幸福を求めてい

う死の商人と、当時の支配勢力との合作が、戦争を惹起する原動力なのである。

かくの如く、支配権力と死の商人のある所には、平和のありようはなく、唯戦争と戦争の間の小休止があるのみである、戦争は政治によって作り上げられ、政治家こそ、多量同時虐殺の元凶である。

人類生存の歴史は、庶民の発見と発見と、その創造の蓄積を除いたら、如何程のものであるだろうか？

火を発見し、土器を作り、稻を植えて育て、木を切り家を建て、魚獣を捕え、鉄銅の鉱石を熔かし、人類を生存せしめ文化を築いた、この労働と智慧は、常に流動する連帯の中に蓄積され、その堆積こそ創造の歴史であり、文化である、それが現在をなしている、この事実、人類史の名による、遠く遙かな祖先の創造になる、労働と智能のもたらすものであり、社会に生活に、いかなる人間も参加を求めざる権利がここにある。

勤労者は労働することによって、それ自身生産に貢献していることは事実なのであり、生産を通して経営に参加していることなのである、これは人間として、当然その配分と管理に参加すべき権利がある、然るに資本主義はこれを疎外すると云う、罪悪を犯して平然としている。

又一般市民は、納税し社会を維持している意義に於て、必然に地域の自治や共同体に参加し得る、生活的権利を所有している。

又学校は、無形の価値の養成が基本的な使命であり、長じては真理探究の為めのである。

この原理は、時の政治の為めの要具になつてはならない、独立性と自治なしには成り立たないことであり、権力維持のための場と化させてはならず、支配者や権力者が、教育行政を口術に、学校管理や運営、教育方針に於て、政治的歪曲と独断があつてはならず、政治的介入は許るざる可きでなく、厳に警戒す可きである、ましてやアメリカ軍部の援助金取得など、戦争に通じる魔手を容認する行為を平然とする教師がいる、又それを承認する、学校行政なるものの教育的腐退は言語道断である。

独立した教育は、学校教育の自治的方針の堅持によつてのみ維持されるからであり、もともと教育の場は、支配も強制も排除した、自主的行為と想念によつてこそ、真理探究は経統されるのであつて、一毛の偽装も巧利性もあつてはならない事なのである。

教育の場は、常に広範な人類そのものの未来に向つてのものであつて、その自主性と共同自治と、社会的連帯意識によつて、納得と同意と自発性の、個性ある場である事が必須条件であり、支配者や一部権力把持者のための、教育機関化は厳にいましむ可きであり、そうあつてはならず、こうなることによつて、教育そのものの目的は退廃し、歪曲され、權威に追従し、個人的な性質のものか、利己的なものに変貌し、社会的な連帯感喪失され、一部のもののためのみ利用される、恐る可き武器になることも、考えられなければ

ならないのである。

人間形成の場としての、学校教育であり、人間平等の原理にもとづく、自主性と共同自治こそ望まれ、又その方向にのみ、常に実現す可く努力されなければならない。と云うことは、支配者や権力者のためのものでなく、万人の共同の進歩と発展の起点になる場としての、基本的原理がここから育成されるからである。これは原水爆や兵器等の殺人用具の如く、人間多量虐殺のための方向を描く、権力支配や、資本主義の持つ巧利性と暴力の持つ犯罪性への否定、排除をも意味する。

こうしたことの完成を思うが故に、大学生が学校の運営や管理、教育の場に参加することは当然である。彼等はすでに青年であり、社会的には一庶民としての生活体の中にあるからである。

又一般庶民は、納税のための要具であつたり、支配権力者の政治的必要時のみの存在であり、一部支配階級や権威者、あるいは特権階級のための存在でしかない、この現状は打破されなければならない。

これは消費の自由と、共同社会に共に住む人間として、社会に対する当然の権利であり、価値の確立及び転換の自由を、権力者にゆだねてはならない。むしろそれ等を彼等から奪還しなければならぬ。子孫の爲め、人類の未来のために、あらゆる決定に、参加す可き権利と自由と人間なればこそその責務がある。

この権利と自由は、支配権力や大企業擁護の資本主義的、あるいは国家資本主義である官僚支配政治（ソ聯、中共）に於ける人格無視と、支配権力による人間疎外に対する当然の抗議をも内包する。

これは、人間として生をうけたものの自由と、平等を心ざしての権利の主張ともなり、反撥と抵抗が、連帯意識に動かされて、その行動が人間的希求を高め、苛烈化をまねきもしよう、又生産の決定に参加した共同管理による、経済的平等の奪還、延いては、国境を示すあらゆる障害の撤去も提案される、必然的径路を描くものでもある。

念のために書いてみるが、古代の頃の司祭者は、禍福を共に分け合う守護神に使えるものであつたが、権力支配者や現実に権威を持てる者は、民衆を偽瞞し使喚し。操従し動員し煽動し、時には殺戮の場に立たしめることはあるが、何ものも創造することのなかつた地位である。

この権力把持者は、人間性の尊重と云うことは、政治的謀略によつて使用される事はあつても、その実質は、排他性や差別と疎外をすることによつて存在し、人間としての共有の権利と尊重が欠除すればこそ、本源的な人間性の不交流をもたらすのである。

ここにこそ、国家と称する時の政府の命脈があり、権力支配と資本主義のある所には、偽瞞と弄落と搾取と対立をなくす事はできない、ここには対立の奨励や煽動と買収が運命的なものとして、教育される事実があり、これ等によつて、資本主義も権力支配もその生

存を維持されている、ここには巧利性による激突と対立が激化し、商人的な巧猾さが衰り、官僚的な独断が必然に横行するそのために、真の意味からの平和はなく、一時的な休止時間があるのみである。

大衆はいつの日、自由と平和と、平等と共同の幸福を迎え得るであろうか？

自主性と、自治の協働労働と、その人間性に即した生活に対する無知、あるいは、人間性の持つ、本来の美と平和と尊厳に目を覆い、耳をふさぎ、併も蹂躪し、従属と宿命観にまで高めた柔順な羊の群、これの又の名を、経済事情に左右せられた歴史と云う。

四、支配と被支配の反覆としての史観

無権力、無支配の原始共産社会が、司祭者的支配（長老、巫女）にある間は、総べてが神につかえる民衆であり、共同の生産者であると共に、共同の土地に、共有の財産所有と、共同の消費を、その生活の総てに持ち、共同社会の為に利己的なものを考えてもみなかったであろう。

この場合の司祭者は、長老を意味するか、巫女の多年の経験者がその任にあった。これは、多年の経験を持った、その知恵と識見を大衆へ奉仕する民衆の先導者でもあった。と共に、大衆の尊敬の表徴であり、共同の禍福と利益の為めの神からの使者でもあった。

然るに、一度び司祭者が武力を行使し。あるいは武将と結託するに及んで、司祭そのものが支配的地位のものとして確立され、政治的優越者として民衆に君臨した。その結果、経済上の独占、又はその指導権をも把握し、土地も物資も彼等の為めのものとなり、この種の、奪略した土地と物資の専断的横略が、その習慣化と因習とから、やがては個人の私有にまで変化し、土地のない農民や、資材のない単なる道具としての、労働者が作られるに至ったのである。

かくて支配者は、祭政一致の揺るぎない地位を確保するに至った。即ち支配関係が樹立され、統一国家が成立し、以後、強権支配の歴史が発祥し、人類の協働と共営の、光榮ある永続した歴史は、泥土にふみにちられ、支配者と被支配者の、生かすものと生かされるものとの、二大階級に分離されるに至った。

彼等支配者による武力は、その初期には神意と称して、民衆に君臨する最高の論拠とし、大衆の盲従をその主要な原因とした。

ある時は、神籠を負うとする行動を、指揮者と大衆そのものの中に、神靈や靈夢の告げとして、その威徳に感激し、敬虔と随順の行動となり、征服が自信の中に進展した。

現在日本と称するこの島々は、何万年もの永い間から住んでいて、宮々と築き上げて来た、旧石器時代人が、縄文式時代、彌生式時代と文化史を創造して来た。この先住民民族にとって、多量同時殺人など思いもよらない、平和な呪術と美を愛する民族であった。